大樹の礎

Taiju no Ishizue

第13号 2013 12.19

発行者：学校法人 城西医療学園

日本医療科学大学
Nihon Institute of Medical Science

〒350-0435
埼玉県入間郡毛呂山町下川原1276
TEL.049-294-9000
URL http://www.nims.ac.jp

Recruitment Briefing session

求人説明会開催

東京国際フォーラムに約430人の施設担当者が一堂に会する

8月27日、東京国際フォーラムにおいて、本学単独の求人説明会が開催され、約430人の施設担当者の方々にお集まりいただきました。

学生たちに医療分野への就職という高い意識を持たせるため、今回初めて3年生も加えた診療放射線学科、理学療法学専攻、作業療法学専攻の3、4年生約420人が参加しました。就職部長の坂本重己教授、参加した4年生、施設担当者の方々にお話を伺いました。

就職率100%を目指し、教職員一同が全力でサポートします

就職部長 坂本 重己 教授

医療技術の向上や卒業生の活躍もあり、今年度は昨年度よりも募集が増えました。特に、作業療法士の募集が多いです。

各施設の担当者の方々からは、成績の良い優秀な学生を紹介してくれと言われることは少ないです。それよりも性格や人柄の良い人材を求められます。どの職業もそうですが、医療施設は様々な職種の人が集まった集合体であり、連携プレーのできる人間でないと、患者様を中心にした医療ができないのです。

8月下旬に求人説明会を実施することについて、保護者様から時期が遅いのではないか、というご意見もありますが、本学では4年生が実習を終えた、就職への意識が高まっているこの時期に開催しています。また、就職支援センターで就職カウンセリングも行っています。

今年も就職率100%を目指し、学生が希望する施設に就職できるように教職員一同が全力でサポートしていきます。

求人説明会に参加して

診療放射線学科 4年
東海林 美玖さん
（宮城県出身）

今日は実際に施設の方のお話を聞いて、資料だけでは分からない職場の雰囲気やどういう診療放射線技師を求めているかが分かりました。実習先では、診療放射線技師の方々がどんなに忙しくても患者様と会話をしているところが良いと思いました。私も忙しくても一人一人の患者様に声を掛けられる、診療放射線技師になりたいです。

作業療法学専攻 4年
櫻井 智佳子さん
（静岡県出身）

今日は複数の病院のお話を聞いたことで、自分のやりたいリハビリができるのは第一希望の病院だと決意が固まりました。

実習を終えたこの時期に、早く臨床に出たいという気持ちを就職先に伝えられることは良いと思います。知識やスキルを磨いて、患者様を笑顔にできる作業療法士になりたいです。

Check!!

就職先が求める人材とは

▼総合病院担当者の声

日本医療科学大学の卒業生が何人か就職していますが、自立していて、自分のやりたいことが分かっている人、また、苦手なことを回避しないで向かって行ける人が多いと感じ、毎年求人説明会に参加しています。

当グループの理念は「自らが受けたいと思う医療と福祉の創造」ですので、自分がやりたいことをスタッフや幹部に積極的に伝えて事業展開を一緒にやっていける人材を求めています。今日も自分の意志をはっきり言ってくれたので、業務に就いた際にもやりたいところで力を伸ばしてもらえると思います。

▼大学病院担当者の声

大学病院は業務量が多い職場です。今の学生さんは人から教えてもらう指導体制に興味があるようですが、自分からいろんなことを求めて学んでいただかないと、指導や助言の時間には制限があります。リハビリは患者様との関係はもちろん、主治医、看護師、理学療法士、作業療法士などのチーム医療内においても連携できるコミュニケーション能力のある方を求めます。病気やけがをしている患者様は普通の対応でも気に病んだり不愉快に思われたりしやすいので、気が利き、患者様と信頼関係を築ける方が向いていると思います。

アメリカ・オレゴン海外研修 座談会

9月3日～9日までの5泊7日、アメリカ・オレゴン海外研修に参加した28人は、プロビデンス総合病院とオレゴン健康医科大学を訪問し、リハビリテーションセンター、リタイアメントセンター、高齢者のためのランチ宅配、乳がんサバイバーとのドラゴンボート乗船を体験しました。参加した4人の方々に、座談会形式でお話を伺いました。

リハビリテーション学科 理学療法学専攻4年
中村 楓さん
村野 香苗さん

看護学科2年
山﨑 歩未香さん
對比地 彩さん

Q：初めにオレゴン海外研修に参加した理由を聞かせてください。

對比地：外国の病院を見学したかったからです。本当は1年生の時に行きたかったのですが、両親に相談したら1年間勉強してからの方が良いのでは？と言われました。

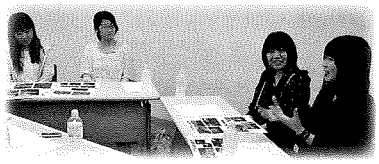
山﨑：私は大学のボランティアサークルに入っているのですが、アメリカの医療に興味があったことと、ボランティアの規模が大きいと聞いて参加しました。

村野：学部長の飯田恭子教授から、前回のオレゴン研修のお話を聞き、興味を持ちました。日本の病院との「違い」を知りたかったこと、海外に行ってみたかったということもあります。

中村：3年生の冬と4年生の春に各2カ月間の実習があるのですが、それが終わってから参加した方がいいと担任の先生からアドバイスを頂いたことと、4年生の友人との卒業旅行にしたいという思いもありました。

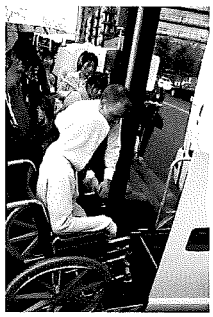
Q：一番印象に残っていることは何ですか？

山﨑：お年寄りに温かい食事を届ける宅配サービスボランティアの体験です。日本ではボランティアはやりたい人がやるイメージが強いのですが、アメリカでは全員が協力的で、しかも自然にやっていると感じました。


左から對比地彩さん、山﨑歩未香さん、村野香苗さん、中村楓さん

對比地：私は、プロビデンス総合病院で、小児科の中でも障害を持った子がいる病棟に行ったことですね。折り鶴をその病棟の患者様の顔の前に持って行ったらニコっと笑った気がして、すごく嬉しかったです。日本では障害を持っていると過保護のイメージがありますが、アメリカでは看護師さんがフレンドリーに接していることが感動的で、日本でもそうするべきではないかと思いました。

村野：オレゴン健康医科大学で勤務医として働く山下大輔医師のお話が印象的でした。家庭医として一つの家族に親身になって接し、それぞれの人の性格を客観的に把握して、家族をうまくまとめるには誰に話したらいいかを考えているそうです。私も理学療法士として、患者様の立場に立って考えられるようになりたいと思います。


バスドライバーのロブさんによる車椅子昇降デモ研修

中村：プロビデンス総合病院で入院病棟のリハビリを見学したことですね。廊下には安全に歩くための装置がありました。日本で膝の手術をすると退院まで約2週間掛かりますが、アメリカはリハビリを早く開始し、手術したその日のうちに退院するケースもあります。医師がきちんと説明して、さらに理学療法士が早い段階で関わることにより、早く退院でき、患者様のお金の負担が抑えられます。

Q：他に得たことはありましたか？

村野：他学科だけでなく、他学年の人との交流ができたのも大きかったです。まだ実習を経験していない人たちがどういう観点でとらえるのか、興味がありました。

山﨑：4年生の先輩は質問の濃さが違うなと思いました。やっぱり勉強は大事だなと思いました。

プロビデンス総合病院で日本人の理学療法士の方に会う

Q：今回の研修を、ご自身の将来にどう生かしたいですか？

中村：早期退院に向けて、早い段階から治療に加わり、短期間で正確な評価を行い、患者様に合った治療プログラムを考え実行できる理学療法士になりたいと思います。

村野：山下医師のお話やアメリカで「日本の医療にも取り入れたらいいのに」と感じたことを忘れないで、就職後に活かしたいです。

山﨑：アメリカで実際に日本人の方が働いている姿を見ると、海外で働いてみたい、という気持ちが高まりました。

對比地：絶対看護師になろうと決心しました。アメリカで日本人の方が通訳をされているのを見て、私は英語が話せて、外国の方に対応出来る看護師になりたいと思いました。そして、海外で働きたいです。

Q：最後に、オレゴン海外研修に興味を持っている方へメッセージをお願いします。

中村：約30万円をかけても行く価値がある、充実した5泊7日でした。通訳の方3人が毎日付きっきりで、分からないことがあったらすぐに教えてくれたので、初めての海外でも安心でした。

村野：学年ごとに感じ方が違うと思います。研修に参加したことで、知識も増えるし、感じ方が変わることもあり、良い経験になると思います。

山﨑：視野が広くなり、経験することが大事だと気付きました。

對比地：行けば自分にとって良いものを得られると思います。でも、少しは知識があった方がより吸収できると思うので、勉強してからの方が良いかなと私は思いました。

皆さんありがとうございました。

ドラゴンボートに乗船

オレゴン健康医科大学で山下大輔医師を囲んで

9月14日

「リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越」に初参加

9月14日、川越水上公園で「リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越」が開催され、本学の学生、教職員の合計38人が初参加しました。この催しは、がん征圧を目指してがん患者様や家族、支援者が24時間交代で歩く「命のリレー」を通じて、勇気と希望を分かち合うチャリティーイベントです。寄付金は公益財団法人日本対がん協会を通じてがん医療推進のために使われます。

1985年、アメリカ人外科医が「がんは24時間眠らない」「がん患者は24時間闘っている」というメッセージを掲げて、がん患者様の勇気を称え、支援するために走ったのがきっかけになり、今では世界20カ国で開催され、毎年世界中で400万人を超える人が参加しています。

本学が参加するきっかけになったのは看護学科の澁谷貞子教授が、茨城県つくば市のリレー・フォー・ライフ・ジャパンに参加し、学生たちにとって患者様の声が直接聞ける機会だと考えたからです。本学は血圧測定とアロママッサージを実施。健康に留意する方や癒しを求める方が多数いらっしゃいました。リーダーで看護学科2年の増田実沙紀さんは、「私は助産師を目指しているのですが、この催しに参加したことで、幅広い世代の人と話す良い機会になったと思います」と話していました。園内のトラックを歩き続けた診療放射線学科3年の加藤潤さんは「これでまた仲間との絆が深まりました」と笑顔を見せていました。

自然の中を仲間と歩くことで絆も深まる

アロママッサージでリラックス

血圧測定チームと看護学科長の小山英子教授

左から増田実沙紀さん、山口優有さん、澁谷貞子教授

記念すべき命のリレー第一歩

第2回公開講座

「100歳まで健康に生きるために 医療と食について」を開催

9月28日、本学3号棟311教室で、公開講座が開催され、107人の方が受講されました。第一部は女子栄養大学上田成子教授より「食中毒はなぜ起こる」をテーマに講義をしていただきました。上田教授は、「冷凍・冷蔵庫内では、食品に付着した微生物は一休みしていたり、低温性細菌等が繁殖するので、冷凍・冷蔵庫で保存しているからといって、その過信は禁物」とお話されました。

家庭での冷凍・冷蔵庫の使い方として、冷蔵室（3～5℃）はすぐに使用する食肉、生鮮品を保存し、チルド室（約0℃）はチーズ、ヨーグルト等の乳製品、練り製品、納豆等、パーシャル室（約マイナス3℃）は食肉、魚、刺身等を入れること。冷凍室（約マイナス18℃）に入れたものは1カ月以内に使いきることを薦め、週に1度は庫内の掃除、整理整頓をすることでドアの開閉時間を短縮できるなど、生活に役立つ情報を教えて下さいました。また生魚や生肉は菌を保有しているので、食中毒を起こさないために、加熱調理をすること、そして、その食材を触った手やまな板をよく洗うことが大切と教えて頂きました。

第二部は本学看護学科の森田恵子教授による「聴力・認知機能を保ち、健やかに老年期を生きる」。森田教授は、難聴がもたらす認知機能への影響を説明し、サクセスフル・エイジング（幸福な老い）のためには難聴を予防することが必要不可欠とお話されました。また難聴高齢者とのコミュニケーションの取り方も教えて頂きました。

講座の最後にはLaughter Yoga International認定リーダーの中井厚子さんによる「笑いヨガ」を体験。家族で参加した76歳の女性は、「とても勉強になりました。私たちの世代が学べる社会人学級があったらいいですね」と語り、娘さんは「先日、父と私が食中毒になったので、今日のお話はすごく勉強になりました。笑いヨガで心が晴れました」と笑顔で話していました。

笑いヨガで皆笑顔

上田成子教授の講義

第13回坂戸よさこいで「日本医療連」として観客を魅了！

8月17日、18日の2日間、埼玉県坂戸市で開催された「第13回坂戸よさこい」に、本学の学生35人が「日本医療連」として参加し、はつらつとした笑顔で観客を魅了しました。本学では専門学校だった12年前から坂戸よさこいに参加しています。チームリーダーの診療放射線学科3年の知野有沙さんに見どころを聞くと「笑顔と掛け声です！学生らしさを見てもらいたいです」との答えが返って来ました。

ステージパフォーマンスは3番目。日本医療連がステージに上がると、観客席からは「カッコイイ！」「若い！」の声と共にステージ上の学生たちに多くのカメラが向けられます。作業療法学専攻3年の澤田凱志さんが「私たちは医療従事者を目指す大学生です」と本学のPRと、オープンキャンパスや大樹祭のインフォメーションを行った後、踊り始めました。

黒地に鼓と牡丹の2種類の衣装を身にまとい、暑さをものともしない切れのある踊りに、観客席からは手拍子が起こりました。理学療法学専攻3年の熊谷望さんは「普段、ダンスサークルで踊っているヒップホップも楽しいですが、皆で踊るよさこいはまた格別な楽しさがあります」と話していました。診療放射線学科3年の嶋崎祐貴さんは「張り切りすぎて、鳴子が壊れました！」と話していました。

その後、通りで流し踊りを開始。沿道で手拍子を送っていた診療放射線学科3年の長南遥香さんのお母様は「こんなに大きなお祭りで踊っているとは思いませんでした。娘が楽しそうに踊っているのを見て私も嬉しいです」と笑顔で話します。お母様のコメントを聞いて娘の遥香さんは「嬉しいですね！夏の思い出として毎年参加しています」と笑顔を見せました。また看護学科1年生のお母様は「短期集中で練習したと言っていましたが、上手に踊れていましたね。高校時代に比べると娘の学校に行く機会が少なくなりましたが、こうして娘が楽しそうに大学生活を送っているのを見るとホッとします。他学年や他学科の方とも仲良くなれるので良いですね」と話していました。

祭りは参加してこそ、楽しさが倍増するもの。来年はぜひ学生の皆さんも参加してみてはいかがでしょうか？